

# 実践を通してでしか学べないこと

大学・人間科学部・3年

期間：令和7年8月18日～20日（3日間）

この度の社会福祉協議会でのインターンシップを通して、私は多くの貴重な学びを得ることができました。特に印象に残った学びは、大きく分けて3つあります。

1つ目は人とのつながりの大切さです。インターンシップの間、3つの社会福祉協議会合同の打ち合わせや地域の子ども食堂の運営補助といった活動に参加させていただきました。これらの経験を通して、改めて人と人との繋がり大切さを強く実感しました。まず、3社合同の打ち合わせで感じたことは信頼関係が築かれているからこそ意見が言いやすく、また連携がスムーズに進むということです。人と人との繋がりが土台となって、実際の支援や施策が形になっていく様子に、福祉の現場での関係作りの重要性を実感しました。また、子ども食堂での活動では、地域のボランティアの方々や子どもたちと実際に触れ合う機会を得ました。特に初めて会う子ども同士が打ち解けていく様子や、ボランティアの方が一人ひとりに声をかけていた場面から、何気ないかかわりの積み重ねが大きな安心感や信頼につながっていることを学びました。

2つ目は地域を思う気持ちの大きさです。福祉の現場においては制度や支援の仕組み以上に「誰かの役に立ちたい」「自分たちのまちは自分たちで守る」という一人ひとりの想いが大切であることを学びました。また、職員や地域住民の方々の活動を間近で見て、地域を思う気持ちの強さに心を打たれました。例えば、災害時の備えや、独居高齢者の孤立防止対策など、どの取り組みにも「誰一人取り残さない」という思いが込められていました。自分が暮らす地域に関心を持ち、主体的に関わろうとする姿勢が、地域社会福祉の原動力になっていることを感じました。

3つ目は想像力と発想力の必要性です。社会福祉協議会の活動には、行政支援だけでは補いきれない柔軟な対応が求められていました。限られた予算の中でいかに住民に寄り添ったサービスを実現するかという課題に対し、職員の方々が常に創意工夫を凝らしている姿勢が印象的でした。私自身も、社会福祉協議会のマスコットキャラクターの活用方法について考えさせていただき、アイデアを形にする難しさとやりがいを感じました。

このインターンシップを通して、地域福祉の現場がいかに人と人とのつながりを基盤として成り立っているかを深く理解することができました。今後は、今回の学びを生かし、自分にできる形で地域社会に貢献していきたいです。

# 児童養護施設でのインターンシップを通して学んだこと

短期大学・芸術表現学科・1年

期間：令和7年8月15日～19日（5日間）

今回のインターンシップで児童養護施設を訪れたことは、私にとって非常に貴重な経験となりました。施設に入る前はどのように子どもたちと関わればよいか、うまくコミュニケーションがとれるだろうかと不安な気持ちもありました。

しかし、実際に子どもたちと関わってみると、その明るさや元気に驚かされ、私の方が逆に励まされる場面が多かったように思います。初めは緊張していた私にも自己紹介を通して自然に話しかけてくれる子どもがいて、一緒に遊ぶうちに少しずつ仲良くなることができました。

この体験を通して大きく感じたことは、子どもたちは一見元気に見えても、それぞれに複雑な背景や心の不安を抱えているということです。笑顔で遊んでいる姿の裏には、家庭での事情や施設での生活に伴う悩みが存在していることを知り、相手の表情や行動だけで判断するのではなく、心の奥にある気持ちにも寄り添うことが大切だと感じました。

また、施設の職員の方々が子どもたち一人ひとりに丁寧に関わり、それぞれの状況や性格に合わせて対応している姿を見て、児童養護という支援の仕事における専門性や忍耐力の重要性を強く感じました。

さらに、私自身の成長としてコミュニケーションのあり方を深く考えるきっかけになりました。子どもたちと関わる中で、声のかけ方や表情、態度ひとつで相手の反応が大きく変わることを実感しました。最初は控えめだった子どもが、私が笑顔で接したり一緒に遊びに参加したりすることで少しずつ心を開いてくれる様子を見て、コミュニケーションの力の大きさを改めて感じました。この経験を通じて、自分も相手に安心感を与えられる存在になれるよう努力したいと思うようになりました。

今回のインターンシップは、私にとって単なる体験ではなく、将来の進路や人との関わり方を考えるうえで大きな財産になりました。特に人の立場に立って考える力や相手の気持ちを考える力が自分の中で少しずつ育ったことを実感しています。

今後もこの学びを大切に、日常生活や学業に活かしていきたいと考えています。

# 人とのつながりの大切さ

大学・看護栄養学部・2年

期間：令和7年8月4日～8日（5日間）

私が社会福祉法人でのインターンシップを選んだ理由は、人と関わることに対する苦手意識を少しでも克服したいと考えたからである。実際に活動に参加してみると、職員さんや利用者さんが私を温かく迎えてくださり、安心して取り組むことができた。

活動内容は、散歩やアイロンビーズ、段ボール作業といった余暇活動、そして会話を通じた交流であった。日常的でシンプルな活動に思えるが、実際には多くの学びを得ることができた。例えば、利用者さんと一緒に散歩をする中で、歩調を合わせたり、相手の体調や気分を察したりする必要があった。ここで私は、相手に合わせる姿勢の大切さを実感した。アイロンビーズや遊びの場面でも、私が一方的に進めるのではなく、利用者さんが自分のペースで楽しめるように関わるのが重要であると感じた。

特に印象に残ったのは、言葉によるコミュニケーションが難しい利用者さんとのやり取りである。最初はどうか接したら良いか迷ったが、表情や視線などを通して気持ちが伝わる場面がときどきではあるがあった。そこから、言葉だけではなく、言葉に頼らない表現を敏感に感じ取ることが信頼関係の第一歩になると学んだ。職員さんが利用者さんに対して常に視線を合わせ、ゆっくりとした口調で声をかけている姿からも、支援の中に相手を尊重する姿勢があることを学んだ。

また、活動の中で強く感じたのは「支援は一方通行ではない」ということである。利用者さんと過ごす中で、私自身が励まされたり、自然と笑顔になれたりする 때가多くあった。自分から利用者さんへという方向性だけではなく、利用者さんからも、たくさん学ぶことがあった。こうした相互作用を通じて、人との関わりは相手に何かを与えるだけでなく、相手から得るものも自分自身の成長や心の豊かさにつながるのだと気づいた。この経験を通して、私は人との関わりに対する考え方が大きく変わった。これまでは相手にどう接すればいいのか、うまく話せるかという不安が強かったが、実際に活動を重ねる中で、完璧な言葉や対応よりも相手を思いやる気持ちと寄り添う姿勢が最も大切であることを実感した。

今回のインターンシップで得た学びは、将来管理栄養士として働く上でも重要であると考えます。食事や栄養の支援を行う際には、単に栄養バランスや摂取量を伝えるだけでなく、その人の生活背景や思いを理解しながら関わる必要がある。利用者さんに安心してもらえるような雰囲気を作り、信頼関係を築くことが大事だと考える。今回学んだ「人とのつながりを大切にする姿勢」を、今後の学びや実習、将来の仕事の中で活かしていきたい。

# 相手の立場を考えること

大学・看護栄養学部・3年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

私は、病院に5日間インターンシップに行かせていただきました。管理栄養士の業務や給食経営管理の実際について学ぶことができました。インターンシップを通じて、調理や配膳の流れを体験しただけでなく、病院食が患者さんにとってどのように工夫され、提供されているのかを知ることができ、貴重な経験になりました。このインターンシップで学んだことが大きく3つあります。

1つ目は、病院で導入されているニュークックチルシステムの特徴です。ニュークックチルとは、調理後にチルド保存し、提供直前に再加熱するシステムであり、下処理、加熱、冷却、保存、チルド盛り付け、トレイメイク、再加熱、配膳という流れで進められていました。煮魚などは再加熱で味が染み込みやすい反面、炒め物では色味が変化するなどの特徴があり、献立作成には工夫が求められていました。当日に調理後、すぐに提供するクックサーブと比べ人員も効率的に配置できる点も学びました。また、チルド庫での管理やウォーターチラーによる冷却など、衛生管理を実際に見ることができました。

2つ目は、患者様一人ひとりの状態に合わせた食事の工夫です。常食、一口大、きざみ食、ムース食等、多様な形態の食事が用意されていました。特にムース食では、色の異なる食材は別々にミキサーにかけ、色合いを工夫して盛り付けるなど、見た目や食べやすさへの配慮がされていました。また、ご飯には、MCT オイルなどを含むエネルギー強化液を加えたり、自作のゼリーを導入したりすることで、栄養面とコスト面の両方に配慮していることも印象的でした。さらに、患者さんが隣の食事を見て「自分も食べたい」と思う場面があることから、可能な範囲で対応し患者様の“食べたい”という気持ちを尊重する姿勢に感銘を受けました。食事は栄養を補うだけでなく、楽しみや生活の質を支えるものであることを改めて実感しました。

3つ目は、チームで働くうえでのコミュニケーションと相手の立場を考える姿勢です。管理栄養士は、患者やご家族だけでなく、調理員、看護師、業者など多くの人と関わります。特に看護師とのコミュニケーションが重要であると強く感じました。患者の食事量や食べ方、嚥下の様子、食後の状態などは管理栄養士だけでは把握できないことも多く、日常的に患者と接している看護師からの情報が欠かせません。栄養計画や食事形態の変更については、看護師と話し合いながら進めることで、より安全で適切な食事提供につながると学びました。また、調理員が理解しやすいよう、点線や印で区別をつけた指示書を作成し、分かりやすく工夫されていました。実際に4人の管理栄養士が献立を交代で作成し、互いに相談しながら業務を進める姿は、チームで働くうえでの協力の大切さを感じました。

この5日間を通して、多職種と働くうえでコミュニケーション能力、相手の立場に立って考えることの大切さを学びました。今後の大学生活においても、この経験を基に意欲的に学びを深めたいと考えています。講義や実習で得る知識を積極的に実践へと結びつけ、さらに将来、管理栄養士として働く際に役立てられるよう努力したいです。

# “食”にこめる思いやりと専門性

大学・看護栄養学部・2年

期間：令和7年9月4日～11日（5日間）

私は将来、病院管理栄養士として働きたいと考えており、今回病院でのインターンシップに参加しました。今回のインターンでは、実際に病院で働く管理栄養士の先生の仕事を見て、現場でしか得られない貴重な経験ができました。学校では、現在は理論を中心に学んでいますが、現場での状況とこれまでの知識にはギャップがあり、改めて管理栄養士の仕事の奥深さと重要性を実感しました。

まず厨房の見学をし、病院特有の厨房設備や動線を間近で見ることができました。まだ授業で大量調理の学習や実習も行っていない段階でしたが、現場を見て得たものは多くありました。今回行かせていただいた病院では調理を他の会社に委託していましたが、病院の管理栄養士も厨房の知識やスキルが求められ、委託先以上の専門性が必要であることを学びました。病院では常食だけでなく病状に合わせた食事や嚥下食等、個人それぞれに対応した食事の提供が必要不可欠です。嚥下食の調理スペースや、盛り付け、配膳の際のダブルチェック等細部にまで配慮された作業を目の当たりにし、仕事の大変さやチームで協力することの大切さを改めて実感しました。また、実際に昼食、夕食の嚥下食の味見も行い、見た目や味の工夫に驚きました。そして1日だけ常食メニューを食べました。エネルギーや栄養素がしっかり計算されており、おいしく味わうことができました。白飯の量が少し多く感じましたが、おかずとのバランスや食べ合わせが丁度よく、食べやすかったです。温かい物、冷たい物のバランスや組み合わせも考える必要性を感じました。また、提供側では沢山ある中の一皿という認識でも、患者さんの立場ではその一皿が全ての食事ということを頭に入れ、一皿に対するこだわりも感じました。

昼食の時間が近くなると、病棟へ行き、カルテを確認したり、何人かの患者さんの所へ様子を見に行ったりして、食事に関する情報を収集しました。カルテの内容と現場の声を統合して判断する難しさを感じると同時に、他職種との連携の重要性も学びました。また、言語聴覚士の訓練の様子を見学し、その上で委託栄養士との相談を通じて、患者さん一人ひとりに合わせた対応が可能となることを実感しました。病院には高齢の患者さんが多く、食欲が低下している方も多くいるため、ゼリーやアイスなどの補食も提供していました。この補食についても沢山説明していただき、さらにサンプルもいくつか頂きました。少量でも栄養価が高く、種類も豊富で、メーカーの工夫と製品の進化に感動しました。サンプルの試食で、実際に味や食感を確認できたことは大きな学びでした。

また、患者さん本人だけでなく、退院予定のご家族の方への栄養指導にも同席しました。退院後の食事はきちんとすることも大切ですが、無理強い禁物なので会話しながら絶妙なバランスが大事だと思います。住所を見て、その方の生活環境や地域の買い物事情を踏まえたアドバイスから、単なる栄養知識だけでなく、柔軟な対応力が求められることを学びました。

短い間でしたが、現場でしか得られない多くのことを学び、充実した5日間を過ごすことができました。そして、病院管理栄養士になりたいという思いがより一層強まりました。インターンシップで学んだことを活かして、今後の学習、さらなるスキルアップに励んでいきたいと思っております。受け入れてくださった病院の皆様、そして担当してくださった管理栄養士の方に心より感謝申し上げます。

# いいかげんに、頑張らない

大学・人文学部・3年

期間：令和7年9月24日～26日（3日間）

私は9月24日から26日までの3日間、育児院でのインターンシップに参加しました。この実習では、子どもたちとの日常的な関わりを通じて子どもたちの主体性や社会性を育む環境の重要性を学びました。また、職員の方々の柔軟な対応の姿勢に感銘を受けました。

初日のインターンシップは、施設長とお話する機会をいただき、子どもたちと関わる際に彼らの視点や感情を尊重し、柔軟な姿勢で接することの重要性を学びました。「分からないことを大切に」「まず共感し、信じる」「いいかげんに、頑張らないことによって予想外のことに対応できる心の余裕を持つ」という言葉は、私の心に深く響きました。この日は、子どもたちとの距離感を測りながら、自分の役割を模索する一日となりました。直接的な交流は少なかったものの、子どもたちの居場所となることや「自立」の意味についても考えることができ、子どもと接することに対する責任について学ぶことが出来ました。

2日目は、子どもたちとの関わりがより具体的になり、実践的な学びを得る機会となりました。午前中は、子どもと一緒にペーパークラフトを制作しました。この活動では、子どもが率先して役割分担を行う姿に驚かされ、主体性と協調性に触れることができました。午後は、施設での子どもたちの迎えや宿題の見守りを行いました。職員の方々が、子ども一人ひとりの性格や背景を理解し、柔軟に対応する姿に感銘を受けました。宿題に集中できないときに無理強いせず、子どものペースに合わせて声かけをするなどの細やかな配慮が見られました。この経験から、子どもたちと信頼関係を築くためには、まず彼らの個性を尊重し、共感することが不可欠だと学びました。最初は子どもたちとの接し方がつかめず苦戦しましたが、彼らの行動を観察し、寄り添う姿勢を意識することで、徐々に受け入れられるようになりました。この日は、子どもたちとの距離が縮まり、彼らの純粋さや優しさに心を動かされる一日となりました。

最終日は、実習を通じて、小規模な共同生活の意義を深く考えさせられました。この施設では、子どもたちが家庭的な環境の中で生活しており、子どもたちが自分で洗濯物を出したり、着替えを選んだりと主体的に行動する姿が印象的でした。また、子ども同士で小さな揉め事が起きた際も、自分たちで解決し、すぐに仲良く遊び始める姿から、このような環境が子どもたちの自立心や協調性を育むことに繋がっていることを実感しました。職員の方々は、子どもたち一人ひとりに寄り添い、彼らの小さな成長を丁寧に見守っていました。この姿勢は、子どもたちにとって安心感を提供し、信頼関係を築く基盤となっていると感じました。また、相手を理解し、受け入れることの大切さを学び、自身のコミュニケーションのあり方を見直すきっかけにもなりました。

このインターンシップは、私にとって大きな成長の機会でした。子どもたちの純粋さや可能性に触れ、彼らを支える環境の重要性を痛感しました。また、自分自身の未熟さや課題にも気づき、さらなる学びへの意欲が高まりました。3日間という短い期間でしたが、貴重な学びの機会となり、私の価値観や将来の進路について深く考えるきっかけとなりました。

# MSW の業務内容について

大学・福祉情報学部・4年

期間：令和7年9月3日～9日（5日間）

私は、将来社会福祉士の国家資格を取得し病院でソーシャルワーカーを行う医療ソーシャルワーカー（MSW）になりたいと思っています。ソーシャルワーク実習では病院実習ができなかったため、医療ソーシャルワーカーの実際に行っている業務内容や入院患者様やそのご家族、その他専門職とどのように関わっているかを学ぶべく、今回病院にてインターンを実施させて頂きました。

今回のインターンシップでは私が今までのソーシャルワーク実習や普段の授業で感じている疑問、インターンシップを通して感じたことをいくつか質問させて頂きました。そこから学んだことは2つあります。

1つ目は、家族や本人のニーズに添えない場合の関わり方についてです。（実習先）病院に入院している患者様は入院できる期間が決まっており、退院後は自宅に戻る人もいれば施設入所を希望される方もいらっしゃいます。ご本人様やご家族様のニーズは様々で、家族の近くの施設を希望する方や金銭面から施設を探す人、お部屋の雰囲気など様々です。しかし、ご本人様やご家族の方のニーズを全て叶えられるわけではなく、ご本人様の状態などを加味していくとご本人様やご家族のニーズに答えることができないこともあります。そのような場合は、曖昧にして答えたり後回ししたりするのではなくはっきりとできないという事実を伝えることが大切であるとおっしゃっていました。ご本人様やご家族様は希望に添えないという事実を受け入れたたり切り替えたりする時間が必要で時間がかかるので早めに対処していくことが大切であるということが分かりました。また、できないという事実は変わりないので曖昧にしても仕方ないという視点にも気づくことができました。ただご本人様やご家族様にできないと伝えるのではなく、無理な時の次の段階を一緒に考え、アフターフォローも行っていくこともMSWにとって大切なことであると学びました。

2つ目は、入院患者様本人とご家族様との関係調整についてです。支援をしていく中で入院患者様本人とご家族様で意見が食い違う場合もあります。そのような時どのようなことを心がけているか教えて頂きました。施設入所や自宅に帰ることを選択するのは、ご本人様やご家族様なのであまりその問題に介入しすぎず、家族で話し合ってもらえるようにしているとおっしゃっていました。具体的には、ご本人様とご家族様がしっかりと話し合えるように話し合いの場を設けることがあるそうです。このことから、MSWはどちらかの味方にならずご本人様とご家族様の公平な立場であることが大切であると学びました。またご本人様とご家族様の仲介者としての役割もあると分かりました。

このインターンで、MSWの業務内容や普段どのようなことを意識して働いているのかを学ぶことができ、MSWとして働くビジョンを見ることができ、将来MSWとして働きたいと強く思いました。今回受け入れて下さった病院には大変感謝しております。

# 障がいのある方との関わりから学んだ「伝える力」

大学・国際学部・1年

期間：令和7年8月4日～8日（5日間）

夏季インターンシップで障がい者支援施設に参加しました。体験内容は、利用者の方々とのコミュニケーション、食事介助、身の回りのサポート、そしてレクリエーション活動など多岐にわたりました。特に印象に残っているのは、重度の障がいをもつ利用者の方々との関わりです。言葉での会話が難しい方も多くいましたが、表情や身振り手振りを通して少しずつ心を通わせることができ、「伝える力」と「感じ取る力」の大切さを実感しました。最初はどうか戸惑いもありましたが、相手の表情をよく観察し、反応を見ながら話しかけるうちに、少しずつ笑顔が増えていったのがとても嬉しかったです。

食事介助では、食べるペースや一口の量、スプーンの角度など、少しの工夫が相手の安心につながることを学びました。早すぎるとむせてしまい、遅すぎると食事が冷めてしまう。その中で、相手の呼吸や表情を見ながら進める難しさと同時に、できたときの喜びを感じました。また、髪を乾かしたり靴下を履かせたりといった日常の支援を通して、相手の尊厳を守りながら手伝う姿勢の大切さも実感しました。何気ない動作にも思いやりを込めることで、信頼関係が生まれるということを実感しました。

さらに、車椅子を押す体験を通して、普段の生活では気づかない多くの配慮があることを知りました。エレベーターの中の鏡が車椅子利用者のために設置されていることや、少しの段差が移動を大きく妨げてしまうことなど、日常の中にある「当たり前」が決してすべての人にとって当たり前ではないことに気づきました。この経験を通して、街づくりや施設の設計などにも、人にやさしい視点が欠かせないことを強く感じました。また、職員さん方の利用者さんとの向き合い方にも多くの驚きを感じました。生活をする上でどのようにしたら利用者さんが満足するのかなど様々なことを考えて日々職務を行っているので、素晴らしい職業だと知ることができました。

今回この施設を選んだ理由は、将来の自分のため、そして親がもし介護を必要とする時に少しでも力になりたいという思いからです。もともと福祉分野に興味がありましたが、実際に現場に入ることによって、支援の仕事は体力面だけでなく精神面でも大きなやりがいと責任を伴うものであることを知りました。体験を通して、介護や支援は「助ける」こと以上に「相手を理解すること」だと実感しました。言葉が通じなくても、思いやりをもって接すれば必ず伝わるということを学び、この経験を将来の人生に活かしていきたいです。今後は、どのような立場の人にも寄り添える柔軟な考え方や、相手を思いやる姿勢を忘れずに、人との関わりを大切にできる人間に成長していきたいと思えます。